

ヤングケアラー・若者ケアラー支援シンポジウム

3-2. 第2部 パネルディスカッション

【コーディネーター】

・黒光 さおり 氏

【パネリスト】

・宇都宮 聡 センター長（教育総合センター長）

・小林 鮎奈 氏（こどもぴあ副代表 一般社団法人ヤングケアラー協会事務局長）

黒光氏／

宇都宮先生、小林さん、ありがとうございました。

まず2人のことで感想を言いたいと思います。宇都宮先生が特別支援教育の中でヤングケアラーという問題もありますよねとおっしゃっていました。実際に私は日本福祉大学のゲスト講師をしていますが、今、大学で社会福祉学を学ぶときは、特別支援教育を枠組みの中でヤングケアラーやLGBTQなどを学んでいます。私も特別支援教育士を取っているのですが、なんでとったかという最初生活保護からはいる人なので家庭で困っている子どもたちの支援をするのがスクールソーシャルワーカーだと思っていたのですが、家庭で困っている子どもの中に、特別支援教育が必要な子が多く、専門的な知識が必要だと取りました。特別支援教育とヤングケアラーに対する関わり方は、密接につながっているし、不登校の支援も同じだと思います。教育総合センターの意義はすごくあるんじゃないのかなと思いました。

小林さんの話を伺って、私と状況が似ていて、重なるところがあったので激しくうなずいてしまいました。病気について知りたかったということですが、実際私が関わっている子でも中学生で統合失調症のお母さんが、陽性症状が出てひどい状態になっているのに、私にお母さんが風邪をこじらせたと言ってきました。「病気について聞いたことがないの？」と聞くと「うん」と言うのでそれは大変なことだと思ったので、『ぷるすあるは（NPO法人）』さんの絵本を使いながら、「今こういう症状が出ていて、薬によってこういう症状になってしばらく休養したらこうなるから大丈夫。遺伝もするとも限らないので遺伝の心配はいらないし、水虫と同じぐらいたくさんある病気だ」と説明したら納得いったのと、夜間、休日に子どもが対応しないといけません。役所も閉まっているし、病院とも連絡がつかなかったり、どんなときにどんな症状が出たら、どこに言ったらいいかを子どもが知っていることが大事です。小林さんは、どこで勉強されたのですか？自分で知ったのですか？

小林氏／

自分で高校生のときにインターネットで知りました。調剤会社さんが作っているホー

ムページで家族の方へというのを見ると、いろいろ書いてあって、なるほどとなり、泣きながら読んだのを覚えています。ただ、今見ると、そのときと違うことが書いてあります。

そのとき読んで残ったのは、遺伝することと、家族の関わりによって症状が良くなったり悪くなったりすると書いてあったと記憶していたんですけど、もっとたくさんの方が書いてあって、自分の中でその2つが衝撃で、それだけ読んでいたと思います。適切な知識を持った人と一緒に知ることが、ショックを受けずに正しい知識を得られると思っています。

黒光氏／

今、水虫と一緒に、と言ったのですがそれは本当かわかりません。そのときは楽しい雰囲気になろうと思いましたが、学術的に間違っていたらごめんなさい。子どもたちに安心できるように、これからの見込みを伝えることは大事だと思います。

宇都宮先生にお聞きします。ヤングケアラーとか家庭でしんどい子どもの話がでてきたときに福祉と教育の連携が出てくると思います。世田谷区や先生の個人的方法として、工夫されていることはありますか？

宇都宮センター長／

区全体で福祉について考える所があり、その1つの部会として教育部会があります。福祉と教育の担当者が一緒に話をする会があります。その時々課題に触れて、情報交換するシステムはあります。

黒光氏／

それは個別のケースではなく、勉強会のようなものですか？

宇都宮センター長／

情報連携するような会です。個別の案件は、課題によってどの部門・部署で対応するかというケース会議をしますが、学校関係は子ども家庭支援センターが中心に動いていることが多いです。

黒光氏／

いろんな事柄について皆で集まって教育も福祉もそろって話し合う会と、個別のケースは個別のケース会議で時々によって関係機関と話すという感じですね。教育機関で、どうしても最初の気づきは学校の先生が多いかと思いますが、研修とか、先生方に対しヤングケアラーに関して、やっていることはありますか？

宇都宮センター長／

おかげさまで、これ（ヤングケアラーハンドブック）を作っていただいたのでこれをもとに、去年まで私、校長をしていたときには、保健教育部会といって、養護教諭を束ねることをしてまして、去年、その話が始まったとき、こういう研修ができたらいね、という話をしています。今年、作ったという話があったので、じゃあ、これを使って研修会を今年度または来年度早々に研修会を企画しますよ、という形をとっています。小学校編、中学校編、と作っていただいたので、小学校の先生には、中学生になるとこういう形になる。中学校の先生には、小学校ではこのような支援が必要だという話ができるようにしていきたいと思います。

黒光氏／

養護の先生はごっついキーパーソンになって、しんどい子は保健室にみんな集まってきます。安心できる養護の先生から見せられると、子どもも素直に受け取れる。逆に知らない人から、こんなリーフレットを渡されたらショックですよ。私ってかわいそうな人に見えてたん？」って思うし、高校生は自分のプライドもある。学校の信頼できる先生から、そっと渡してみる形で、活用していただけるとめちゃくちゃいい。しかも、デザインがめちゃくちゃ可愛いので、ぜひ、ぜひと思います。

宇都宮センター長／

もう1つ、東京都は小中学校に、週1日、スクールカウンセラーを配置しています。世田谷区は、それ以外にも、区のスクールカウンセラーを配置しているので、子どもたちも保護者も相談できる機会があるので、学校に来て活用していただいています。

黒光氏／

スクールカウンセラーもぎっしり埋まっていて、で、実は小学校なんかは保護者の方で埋まっていて、子どもになかなかアクセスできないところがあるので、それだけ十分あると、子どもにとっていいと思います。ありがとうございます。

では小林さんに伺います。LINE相談もされていて、めっちゃ難しいけど、工夫されていることはありますか？

小林氏／

そうですね。本当に難しいと思います。テキストでの相談は難しい。ただ大事だと思うのは、子どもが相談しやすい窓口を作ることを思っていて、その1つが、LINEとかSNSだと思っています。子どもにとっては、一言とか「あ」と一文字だけ送ってくる子もいます。何かを送ったときに、何かが返ってくることが大事だと思っています。その中で、大事にしていることは、いろいろあります。基本的には自己紹介をするのは、

SNS であっても大事に思っています。相手と同じような話し方、子どもの考え方を勉強しながら一緒に話すというか、知りながら一緒に話すようにしています。まだまだ私にも、忘れてしまった子ども心があったりして、子どもの世界を教えてもらいながら一緒に話しています。あと、ヤングケアラーを支えることは、その場で解決できることではない。何かあった時に話せるように、関係づくりをするのを大事にしています。今話しても、明日も話したい、次も話したいと、継続して話せるように工夫しています。

黒光氏／

家でケアしていると、わざわざどこかに行って、あるいは予約して四角い部屋で話すことは、子どもや若者にはハードルが高いため、隙間時間にちょっとだけ聞いてもらいたい時に使える LINE は、いいと思います。

個人的に、たぶん小学校や中学校の時は、当事者会やピアサポートは難しいですが、大人になると逆に、役所に行くよりも LINE 相談やオンライン当事者会の方がいいですね。今から役所に行くのは、恥ずかしくて行きたくない。同じような子がいるのではないかなとか、話を聞いてみたいとか思いがあるので、私もそんなのがあったら参加したのに、と思います。活動されていて成人してからがしんどかったと話しましたが、大人になっても生きづらい人たちは、たくさんいるのでしょうか。

小林氏／

たくさんあると思います。さっきの ACE の中でも、数が多いほど、大人になってからの身体的苦勞もありますが、精神的な苦勞を抱えることが多くて、それが生きづらさに現れると思います。

私自身も、若い頃は今を頑張るだけで済みました。でも、大人になってからは、今と先のことを考えないといけない。それと自分のこともあり、自覚としてはそれが大変だったなと思いました。社会人になってから自分の気持ちを話すこととか、整理して言葉にするとか、誰かと協力することが、1人で頑張ってきたらそこが苦手になっていたなと大人になってから気づきました。大人になってから感じることはたくさんあり、こどもぴあでは、あるある話として、笑って話せるほど当たり前にあることです。

補足ですがこどもぴあの団体は、ヤングケアラーではなくて、精神疾患の親を持つ子どもとしているので、その中でヤングケアラーと感じているのが7割くらい。そうじゃないと思っている人も、中にはいます。

黒光氏／

親が精神疾患で、看護をしていた、家事をしていたら、ヤングケアラーだなと自覚しやすい。逆に統合失調症の症状が激しすぎて見守るしかなかった、自分は何もできなかった、ヤングケアラーじゃないと思っている方も多いいと思います。見守りもヤング

ケアラーであると思うのでその辺のズレがあると思うけど、同じ立場の人と話してみたい、貴重な場所になっていると思います。

時間があまりないですが、今日、最後まとめて話しますが、小林さんや宇都宮先生の話全部聞くなかで、ヤングケアラーの子どもや若者を支援するとき、特に子どもですが、家族まるごと支援がすごく大事です。

私が最近買った漫画で、「ターラの夢見た家族生活」、フランスのエデュケーターという方がいて、家の方にも子どもにも寄り添って支援していく話です。

私が普段子どもたちと接していると子どもたちは、自分の話も聞いてほしいけど親との関係性でうまく言えないとか、進路の話ができないなどで悩んでいます。お家の方と良い関係を保って、お家の方との間で調整してくれるとか、お家の方の支援をしてくれる人が子どもにとって大事な人なので、日本でもヤングケアラーの問題は、家族や子どもの責任ではなくて社会で、みんなで、家族をまるごと支援していこう、あるいはまだケアラーになっていなくても、みんなでつながりあって、自己責任の社会にしない、そういう社会を作っていこうということを一人ひとりが考えながら生きていくことが大事ではないかと。

今日のパネルディスカッションを終わります。

感想を一言ずつ、1分くらいをお願いします。

宇都宮センター長／

感想というか、1つだけ、皆さんにお話ししておきたいことは、コロナ禍は学校にとって非常に大きかったです。何がかというと、地域の方々やゲストティーチャーの方々が、なかなか学校に入れなくなりました。そうすると、より多くの目で子どもを見て気がついて、「先生あの子、大丈夫？」と言ってくれる地域の方が、なかなか入れなくなった。それを、今、ある学校で、町会や学校運営委員さん、まちづくりセンター近所の大学生等いろんな人に入ってもらって、子どもと交流する時間をつくり、先生方と地域の方々が、学校の学びについて、子どもたちが楽しくなるような学びについて話し合う、そういった会議を開いています。

「学び舎」というのがあり、幼稚園、保育園、小中学校とつながりみんなで、地域で、子どもたちを見ていこうという雰囲気、これから何年かかけて醸成していくので、地域の方にもお願いして、学校は怖くないです。ぜひ学校に出かけて子どもたちをご覧いただくとありがたいと思います。

小林氏／

みんなずっと言っていたことなんです、ヤングケアラーって何かが悪いのではなく、家族も頑張り過ぎている状況。頑張り過ぎている状況が生まれると大変だと思います。孤独、大変な期間が長くなることの影響が大きいと思うのでそこに支えがあればいいと

思います。「過度に大変だね、過度にかわいそう」となることで、より孤独になることが生まれると嫌だなと思います。なので、ヤングケアラー・その家族のポジティブな部分も支えていけたらと思っていますし、家族と子どもが今よりより幸せになるように、そういう目線で地域でも支え合っていけたらいいと思います。

黒光氏／

ありがとうございました。瀬川課長にマイクをお返ししたいと思います。

瀬川課長／

ありがとうございました。

以上をもちまして、第2部のパネルディスカッションを終了します。改めて、黒光先生、宇都宮センター長、小林様、本日は誠にありがとうございました。